

の人と出会ううち、「知る」というのは、知識を得ることではなく、体感することだと感じた。

実際に会って話を聞くと、言葉の裏の思いが伝わってくるのが少なくない。特にここ数年、子ども達の取材をする機会が多くなって、より、そのことを実感している。

虐待されても必死で親をかばう小学生。

高校に入学したものの、被差別部落出身であることがバレないかと怯える女子生徒。

父親のリストラが原因で崩壊寸前となった夫婦仲をなんとか繋ぎとめようと頑張る子ども。

彼らの本当の気持ちは、彼らに接してみないと分からない。

社会のゆがみを必死で受け止めようとしているその姿は、正義感のない私でさえ、早く何とかしなければと思う。

人権を考えるのは自分のため

「人権って、何のために考えなあかんの？」

人権リーダーが始まった頃は、心の奥でよく自問していた。しかし今ならこう答える、「自分のため」。

ストレスがたまった現在の社会では、思いも寄らないことで理不尽な扱いを受けることもある。

そんな世界は、常に緊張していなければならない。

そうではなくて、自分の弱いところをさらけ出しながら本音で語れる環境……他の人と違う所があっても互いに認め合える環境がいっぱいあれば、思いっきり深呼吸して生きていけるのではないかい。

自分や我が子が将来、半生を振り返るときに、「こんな人生、二度と^い要らん」なんて思うことのないよう、人権リーダーはこれからも続けていきたい。

用語解説

【槇坪 多鶴子（まきつぼ・たづこ）さん】

映画監督・企画制作パオ（有）代表取締役

2000年公開の「老親 ろうしん」が全国的に話題を呼びました。リウマチのため車いすでメガホンをとる、車いすを押すのは、自身の老親、87歳のしかも痴呆症の母親。介護しあう母子の姿がそこにはあります。自身の体験も重ね合わせた「母のいる場所」（2003年度作品）は、現在、各地で上映会が開かれ、介護の選択と家族それぞれの自立を考える話題作として、反響を呼んでいます。

パオHP >> <http://www.pao-jp.com/>

【老親 ろうしん】

～女が結婚するとふつう親が4人になる～

「介護で力尽きる前に自分を生きたい。」

「老いるとは、新しい自分に出会い続けること…」

老親介護の生活を描く中で、性別役割分担や女性の生き方を問い直して高齢者の自立を見つめています。オトノサマで生きてきた舅が、妻の死後、一家の主夫に大変身。元嫁母子を支える生活に生きがいを見出ししていきます。孫娘の「おじいちゃんはゆっくり成長するタイプ」という発想は介護の問題に悩む主人公の生き方をユーモラスに描いています。

【母のいる場所】

～母の介護をめぐる起こる主人公と父親の葛藤～

「酒、タバコ、外泊、恋愛の自由」が保障されている老人ホームとの出会い。

母は笑顔を取り戻し、そこが「母の居場所」に…

人は誰でも老いを迎え、病気や障害を抱えたり、不安と孤独から痴呆になったりする可能性があります。介護する人される人、それぞれの自立とは？ 介護とは？ ふさわしい最後の居場所はどこなのか？ 夫婦のあり方や親子関係を見つめ直すきっかけになる作品です。

【人権リーダー】

近畿の自治体が広域的・効果的な人権啓発のために提供している啓発ラジオ番組です。

毎週金曜日の夕刻、毎日放送の「MBSニュースワイド アングル」の中のコーナーで、さまざまな人権問題をテーマにタイムリーで身近な話題をわかりやすく語りかけています。

毎回リスナーからの反響が数多く寄せられています。シリーズ「私の人権体験記」と題してエッセイを募集した際には、幅広い年齢層の方からの応募が多数あり、近畿における広域的な人権啓発番組として定着しています。